

○高知県のヒレタゴボウ そのほかの帰化植物について (山中二男) Tsugio YAMANAKA: On *Ludwigia decurrens* Walt. and other naturalized plants in Kochi Prefecture, Shikoku.

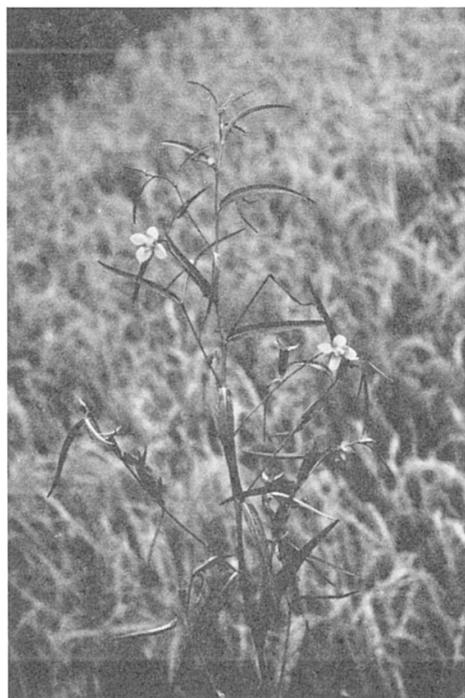
ヒレタゴボウ *Ludwigia decurrens* Walt. (*Jussiaea decurrens* DC.) は北米の原産で、ミズキンバイとおなじように、これらのなかまでは花の大きい植物である。茎はまったく無毛で葉柄が流れて翼をつくり、キダチキンバイ *L. octonervia* var. *sessiliflora* Raven (*J. suffruticosa* L.) やタゴボウモドキ *L. micrantha* Hara (*J. micrantha* Kunze) とは明らかに区別できる(第1図)。本種がわが国に帰化していることを最初に報告したのは村田(1956)で、これは山本四郎の愛媛県松山市三津での採集にもとづくものである。しかし、その後ほかの地方に帰化してはびこってるという例はきかない。

ところが高知市付近には、第二次大戦後この植物があらわれはじめ、しかもここ数年急に繁茂がめだってきた。侵入の経路はよくわからないが、好んで湿地ことに水田に生じ、多くは8月頃から花が咲きはじめ、秋には多数の種子ができるため、今では水田の

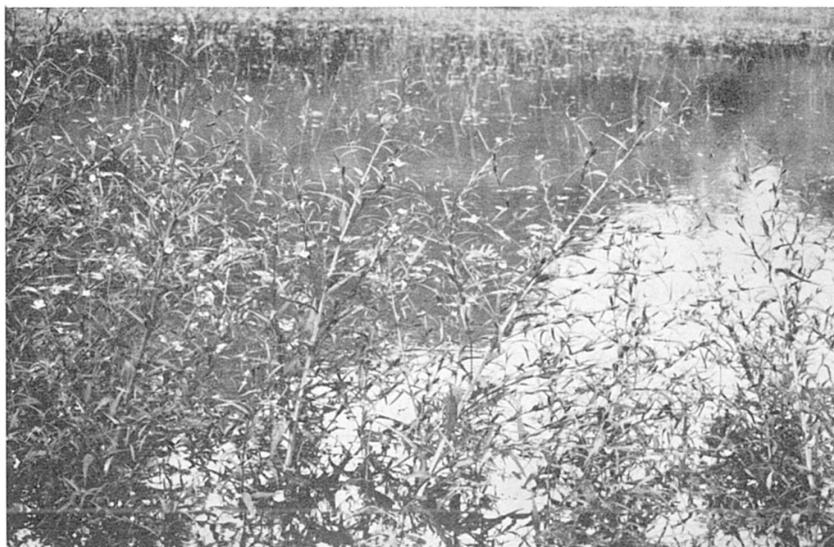
やっかいな雑草になりつつある(第2図および第1表)。多いところでは、花の盛りに田が黄色になるほどのことがあり、生長のよいものは高さ1m近くにもなる。しかし今のところ、地理的にその生育範囲はさて広くはなく、おもに高知市を中心とした平野部で、東は室戸市までは及んでいないし、西も須崎市まで達していないと思われる。

なお村田の報告よりさきに久内(1950)は、高知市付近の湿地には空襲後、オキナワチョウジタデすなわちキダチキンバイの毛のほとんどない型のものが繁殖しつつあると記し、これはそのまま杉本(1965)にも引用されているが、上にのべた事情から考へて、これもおそらくヒレタゴボウのことであろうと思われる。

ヒレタゴボウとおなじように、最近水田を中心に見られる帰化植物に



第1図 花と果実をつけたヒレタゴボウ *Ludwigia decurrens* Walt. (高知市福井、1965年9月15日)



第2図. 24号台風の大雨で水没した水田のほとりに群生するヒレタゴボウ *Ludwigia decurrens* Walt.  
(高知市福井, 1965年9月15日)

は、ほかにホソバヒメミソハギ *Ammannia coccinea* Rottb. がある。これも今はまだ高知市や南国市などの水田に見られるだけであるが、いちじるしくはびこっているところもあり、今後増加する傾向がある。

この両者にくらべて、ツルノゲイトウ *Alternanthera sessilis* DC. は、より古くから野生化したものとみなされる。タカサゴロウなどとおなじように、水田とか池や沼のほとり、あるいは路傍や畠地などにも稀でなく、生育地は県下の海ぞいの平野部全体にわたっている。このなかまのホソバツルノゲイトウ *Alternanthera nodiflora* R. Br. は、近頃高知市朝倉の数か所で見つかったが、県内のほかからはまだ記録がない。これは湿地ではなく、むしろ乾燥したところに生えている。

湿地に生ずるもので、最近大井(1965)の記録まで長らく四国からは知られていなかったキシュウスズメノヒエ *Paspalum distichum* L. も帰化植物とみなされるふしが多い。高知市朝倉および鴨田の田間の水路でよく繁茂して、ほとんど純群落をなすところがあるが、ほかの産地はわかっていない。これも今の場所に古くからあったものではないようである。

わが国の南部で、高知市などのように、水田や湿地に、このような熱帯にひろく分布している植物の帰化がめだちだしたのは、最近の傾向のひとつといえそうである。もっとも、これも今まででは高知県の帰化植物についての記録が不たしかであったせいによる

第1表 イネを刈ったあとの水田で、ヒレタゴボウの群生するところの組成  
を要約して、おもな植物のみの頻度(ローマ数字)と平均優占度  
(アラビア数字)を示す(1963年10月下旬)

物名	場所	高知市福井		高知市鴨田	
		高	知	市	福
ヒレタゴボウ	V	3	V	3	
ヌメリグサ	V	+	V	3	
ヤナギタデ	V	2	IV	+	
カワラスガナ	V	2	II	+	
キクモ	I	+	V	2	
イヌビエ*	V	1	III	+	
タマガヤツリ	V	1	I	+	
ヒデリコ	II	+	V	+	
オモダカ	IV	2	IV	+	
ツルノゲイトウ	II	+	III	+	
ミズワラビ	—		V	3	
コナギ	V	2	—	—	
アカウキクサ	—		V	+	
マツバイ	—		V	+	
ハリイ	—		V	+	

\* イヌビエとケイヌビエを含む。

かもしれない。いずれにしても、なおほかにも書きとめておいてよいものが少なくないが、それはまたの機会にまとめるることにする。

終りに、いろいろ御教示いただいた大井次三郎博士にあつく感謝する。(高知大学教育学部生物学教室)

### 文 献

- 久内清孝 (1950) 帰化植物 183. 村田源 (1956) 植物分類地理 16, 90. 大井次三郎 (1965) 改訂新版日本植物誌 174. 杉本順一 (1965) 日本草本植物総検索誌双子葉篇 370.

○高等植物分布資料 (44) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (44)

○ヤチラン *Malaxis paludosa* Sw. 北半球亜寒帯の高層湿原に稀産する。日本では青森県の八甲田山、群馬県の尾瀬沼、栃木県の鬼怒沼と日光戦場が原の産地位しか知られていない。本種に1産地を加えよう。それは福島県南会津郡の浅草岳で、山頂に近い